

借り上げ住宅問題 本質を指摘



「余震は今も続いているねん…」。
借り上げ復興住宅に住むAさんが、
ボツリと言った言葉である。

ここは1人暮らしの高齢者はかりだ。借り上げ復興住宅は20年たてば出て行かなければならず、入居後、16年が経過した。この間、約半数が死去し、うち6人が孤独死、2人が施設に入居した。Aさんは、これまでに2回住み替えをあっせんして申し込んだが、落選。この間に身体の不具合が急速に悪化した。つえなしで歩けなくなり、「こんな身体でどこにも行かれへん。ここで死ぬよ」と言っ

行政の「原則論・公平論」、法的不備と矛盾などを指摘し、問題の本質を理解できた。何より、当事者の叫びが胸に突き刺さった。

行政は、転居基準を高齢者・障害者に配慮した社会的弱者救済措置と言いたげだが、自治体間の転居基準の違い(兵庫原則80歳以上、神戸市85歳以上は転居の必要なし)や市営・県営復興住宅は全員転居しなくていい、といった不公平・不平等をどう説明するのだろうか。

記事に書かれていた老夫婦の叫びは聞くに忍びない。引越しの朝、玄関先で認知症が進む妻が泣いていた。「お父さん、行きたくない」。

夫が諭した。「ここは自分の家やない。仕方ないんや」。震災を生き延びてくぐり抜け、苦難を乗り越えた人々が今、ついにすみかの復興住宅で再び心を不安に陥れる。

この復興住宅の掲示板に「お知らせ」が張られたのは4年前。民間借り上げ住宅のため、20年で行かなくてはならないとあった。91歳の女性は不安となり、引越してしま

復興住宅に住む安田さん(88)の言葉は重い。「震災後、高齢者は弱者と呼ばれました。弱者は震災で死に、避難所で死に、仮設住宅で死に、復興住宅でも死にました。4回の危機を乗り越えた弱者に、5回目の危機が迫っています」。人の痛みを誰より知るはずの被災地行政がすべき事ではなからう。

今、被災高齢者が仮設の時と同じ思いを復興住宅で味わっている。

「20年目の漂流―借上げ復興住宅」(1月11日付から社会面)の連載は、

この批評は夕刊4版、朝刊14版に基づくものです

「チンドンの力」に同感



「みなさん、チンドンがやって来ました。変な格好ですが、まあ聞いてやってください」。にぎやかな大学生チンドンの第二声。けっぴりな格好、おもしろい話、懐かしのミュージック(青い山脈など)、チンドンの音色が、疲れ切った被災高齢者、震災障害者の心をたたいた。転げ回るほどの笑い声とグシャグシヤの笑顔が会場を満たした。

この時、すでに阪神・淡路大震災から16年が経過していた。チンドンと同時に、素人落語も登場した「よろず相談室仲間の集い」には被災者とボランティア約100人が集まり、楽しいひとときを持ったのだ。

チンドンの取り組みは、「ドンチキがゆくー」神大チンドン屋19年の軌跡(1月13日付から神戸版)で連載された。

「神大モダン・ドンチキ」は、震災のボランティア活動がきっかけで誕生したこと。プロも生み出したこと。福祉施設、地域のイベント、東日本大震災と活動の場を広げてきたこと、などが紹介されていた。

不思議なチンドンの魅力を実感していた私は、宮城県石巻市青葉地区の夏祭りに昨年、一昨年と参加してもらった。本番前、呼び込みのため

地域に点在する5カ所の仮設住宅を練り歩いた。飛び出してくる子どもたち、疲れた顔に笑顔の高齢者、支えられながら戸口まで出てきた人の顔には涙。一緒に歌い、記念写真を撮る。チンドンのどこに人の心を動かす、癒やす力があるのだろうか。

「神大モダン・ドンチキ」の誕生に関わったのは、自身が被災者が惨状を見た人々だった。

「お花ちゃん」(63)の家は半壊。それでも避難所運営の手伝いを始めた。5カ月後の交流イベントで、寄せ集めの楽器と衣装でにぎやかしのチンドンを始めた。そこには一緒に歌い踊る住民の笑顔があったという。「こんな時だからこそ、笑いが力をくれるんや」との思いが19年たった今も、活動を支えている。

昨年の石巻の夏祭り。壊滅地帯で会場の周りに家はない。夏祭りは震災後、初の開催。チンドンは地域の人たちの拍手に見送られ、更地に点々と建てられた家々を酷熱の中、2時間練り歩いた。家から出て来る人々と語り合い、1曲演奏し、踊りまくる。笑顔、涙、記念写真。「また来てー」の声を背に受けたらふらのチンドンは輝いて見えた。

神戸の復興住宅は高齢化が進み、自治会運営が困難となっている。東日本では先が見えない仮設生活が人々を疲れ果てさせている。チンドンの不思議な力は、きつと心にエネルギーを注いでくれることだろう。

この批評は夕刊4版、朝刊14版に基づくものです

復興住宅問題 解決の糸口



「死にたい」。阪神・淡路大震災から20年目、災害復興住宅に住む1人暮らしの高齢者の声である。

「よろず相談室」は、すべてを失った被災者の話し相手を活動の柱としてきた。「1人ではない」「置き去りにされていない」と伝える活動を続けてきた。少しでも前向きに歩んでほしいとの願いがそこにあった。だがここ数年、「孤独」ではなく「生きることの恐怖」が、復興住宅を覆っている。あの震災を生きのびた命が、19年たった今、生きる恐怖にさらされている。

何回訪問しても留守だった人が実は昨年9月に亡くなっていた。「また来てね」と元気だった人の家へ、次行くと玄関に葬儀の紙が張ってあり、ガッカリすることが多くなってきた。そして、「もう死にたい」と言われたとき、どのように対応し、どのように考えればいいのかだろう。震災後の傷痕は深刻化し、19年間、寄り添い続けてきた訪問ボランティアの限界を感じるこの頃である。

「明舞団地に生きてくまろびろき50年」(1月1日付から明石版で連載)は、復興住宅が抱える高齢化問題や自治会崩壊などに対する解決の糸口となる記事だった。明舞団地の

取り組みは以前から聞いていたが、この記事は詳しく書かれており、何より人の声が聞こえてきた。

50年目を迎えたオールドニュータウン明舞団地には、ピーク時の57%の2万1千人が暮らし、高齢化率は4割近くになる。県が若者の居住促進策として進める「学生シェアハウス」に入居した学生たちは、自治会運営の手伝い、階段の蛍光灯交換など、学生だからできる仕事を高齢者と団地活性化のため担っている。

一方、復興住宅の高齢化率は50%で、そのほとんどが1人暮らし。16年前に仮設住宅から優先順位と抽選で入居し、当初「隣は知らない人」状態だった。現在、自治会役員の高齢化、後継者問題は深刻だ。

高齢者はかりの住宅に若い人が「ずっといてくれる」安心感は計り知れない。また、自治会活動の手伝いや見回り活動、電球の交換などを手伝ってくれることで、復興住宅は活性化するのではないだろうか。高齢者たちは、この実現に向け署名活動をすると言っている。大学生にとっても、被災高齢者の思いを知ることとは、社会で生かされるであろう。

1950年、大阪市生まれ。東京理科大学卒業後、2012年まで神戸の夜間定時制高校教師。阪神・淡路大震災のボランティアをきっかけに、復興住宅訪問や震災障害者と家族の集い、東北支援を続ける。

この批評は夕刊4版、朝刊4版に基づいています



NPO 法人

よろず相談室

復興住宅に住むひとり暮らしの高齢者のお宅を訪問したり、震災障害者とその家族のつどいを行っています。

主に日曜日、ボランティアスタッフと共に活動しています。

活動は「人」がすべて、です。あなたもどうぞご参加ください。

- ・「震災高齢者訪問活動」…第2・4日曜日
- ・「震災障害者と家族のつどい」…第1日曜日
- ・「東北支援活動」…第3日曜日を含む3日程度(東北の現地に向かいます)
- ・「手紙支援活動」…第2・4日曜日
- ・「識字教室」…火曜日の午前

詳しくはホームページへ <http://npo-yorozu.com/>